

2025(令和7)年度 第2回 知床世界自然遺産地域

適正利用・エコツーリズム検討会議

議事概要

日時：2026年3月10日（火）13：30～16：45

場所：斜里町 斜里産業会館 2階大ホール（Web併用）

<議事>

1. 長期モニタリング計画に基づく調査結果について
2. 個別部会等からの報告
 - (1) 厳冬期の知床五湖エコツアー事業
 - (2) 知床五湖地区における取組み
 - (3) カムイワッカ地区における取組みの進捗状況
 - (4) ウトロ海域における取組み
3. 関係機関の取組み報告
 - (1) 国立公園指定60周年・世界遺産登録20周年記念事業について
 - (2) シレコプロジェクトの進捗について
4. 羅臼岳ヒグマ人身事故を踏まえた検証と対策の方向性について
5. エコツーリズム戦略の見直しについて
6. インタープリテーション全体計画の策定状況について
7. その他

<出席者>

適正利用・エコツーリズム 委員

北海道大学大学院 農学研究院 教授（座長）	愛甲 哲也	
弘前大学 名誉教授	石川 幸男	
北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 准教授	石黒 侑介	web
金沢星稜大学経済学部地域システム学科 講師	船木 大資	
株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役	松田 光輝	
北海道立総合研究機構 エネルギー・環境・地質研究所 専門研究員	間野 勉	

以上、五十音順

科学委員会委員長

北海道大学 名誉教授	中村 太士	欠席
------------	-------	----

地域関係団体

ウトロ地域協議会 事務局	桜井 あけみ	
特定非営利活動法人 知床斜里町観光協会 事務局長	新村 武志	
(一社)知床羅臼町観光協会 会長	和久井 一躬	web
知床ガイド協議会 副会長	滝澤 大徳	
公益財団法人知床財団 理事長	村田 良介	
同 事務局 局長	玉置 創司	
同 事業部 部長	山本 幸	web
同 事業部 保護管理事業係 係長	金川 晃大	
同 調査研究室 主任研究員	秋葉 圭太	
知床自然保護協会 会長	綾野 雄次	web
斜里山岳会 副会長	山中 正実	
同 事務局 局長	笠井文考	
羅臼山岳会	欠席	
羅臼遊漁釣り部会 事務局	天野 美樹	
知床小型観光船協議会 会長	神尾 昇勝	
知床羅臼観光船協議会 会長	長谷川 正人	
一般財団法人自然公園財団 知床支部 副所長	向山 純平	
一般財団法人自然公園財団 知床支部	畠山 声葉	
知床ウトロ海域環境保全協議会	欠席	

以上、設置要綱記載順

関係行政機関

斜里町 産業部 商工観光課 観光係長	岩淵 聖也	
同 総務部 環境課 自然環境係 係長	吉田 貴裕	
羅臼町 産業創生課 係長	白柳 正隆	web
同 産業創生課	佐藤 大誠	web

事務局

環境省 釧路自然環境事務所 所長	岡野 隆宏	
同 釧路自然環境事務所 国立公園企画官	渡邊 雄児	
同 釧路自然環境事務所 世界自然遺産専門官	鈴木 郁子	
同 釧路自然環境事務所 係員	新實 樹	
同 ウトロ自然保護官事務所 首席国立公園保護管理企画官	二神 紀彦	
同 ウトロ自然保護官事務所 国立公園利用企画官	伊藤 薫	
同 ウトロ自然保護官事務所 国立公園管理官	渡邊 寛明	
同 ウトロ自然保護官事務所 自然保護官補佐	田中 華蓮	
同 羅臼自然保護官事務所 自然保護官	葉山 翔太	
林野庁 北海道森林管理局 計画保全部 計画課 課長	寺村 智	web
同 北海道森林管理局 計画保全部 自然遺産保全調整官	長崎 正明	web
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 所長	川崎 文圭	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター 生態系管理指導官	作田 明	
同 北海道森林管理局 知床森林生態系保全センター	田中 良	
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 署長	山之内 弘幸	
同 北海道森林管理局 網走南部森林管理署 総括地域林政調整官	清水 亜広	
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 署長	鷹野 孝司	
同 北海道森林管理局 根釧東部森林管理署 野生鳥獣対策官	細谷 誠	
北海道 環境生活部 自然環境局 自然環境課 自然公園担当課長	島村 哲也	web
同 環境生活部 自然環境局 自然環境課 課長補佐	小峰 健一	web
同 環境生活部 自然環境局 自然環境課 主査(知床遺産)	黒田 芳人	web
同 環境生活部 自然環境局 野生動物対策課 ヒグマ対策室 主幹(計画推進)	橋本 和彦	web
同 環境生活部 自然環境局 野生動物対策課 ヒグマ対策室 主査(計画推進)	三好 和貴	web
同 環境生活部 自然環境局 野生動物対策課 ヒグマ対策室 主任	鈴木 輝	web
同 経済部 観光局 観光振興課 主幹(AT調整)	佐藤 雅代	web
同 経済部 観光局 観光振興課 主事	松原 巧実	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係長	小川 耕平	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 主事	宮崎 祐伍	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 主事	加藤 亮平	web
同 オホーツク総合振興局 保健環境部 環境生活課 知床分室 主幹	三井 義也	web
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係長	河崎 淳	web
同 根室振興局 保健環境部 環境生活課 自然環境係 技師	西嶋 圭	web
国土交通省 北海道運輸局 北見運輸支局 支局長	大野 邦晴	web
同 北海道運輸局 北見運輸支局 首席運輸企画専門官	高松 正繁	web
同 北海道運輸局 釧路運輸支局	欠席	

運営事務局

公益財団法人 知床財団 事業部 羅臼地区事業係 係長	坂部 皆子	
同 事業部 羅臼地区事業係	谷 洸哉	
同 事業部 公園事業係	原口 桜子	
同 企画総務部 普及企画係	松田 隆聖	
同 企画総務部 普及企画係	佐々木 吾珠	

※1 議事概要の記述において、発言者の敬称・肩書などは省略しての記載とした。行政関係者の所属については、一部略称を使用した。

※2 文中、検討会議は適正利用・エコツーリズム検討会議の、WG はワーキンググループの、AP は河川工作物アドバイザー会議の、ML はメーリングリストの、それぞれ略称として使用した。

<議事概要>

葉山：令和7年度第2回適正利用・エコツーリズム検討会議を開催する。開催にあたり、事務局を代表して環境省釧路自然環境事務所長の岡野よりご挨拶申し上げる。

岡野：本日は年度末のご多忙の中、委員の皆様、並びに関係機関の皆様、地元団体の皆様に参加いただき感謝申し上げます。ご承知の通り、今年度は世界自然遺産登録から20周年となり、さまざまな記念事業も行われた。先日も札幌で知床世界遺産の20年を振り返るシンポジウムも開催され、地域の関係機関による地域連絡会議と専門家による科学委員会、この二つの仕組みがお互いを支え合って動かす知床方式が外部からも高く評価されていた。一方で、この20年の中で解決できた課題、それから新たに生じた課題、そして改めてこの仕組みも見直していく時期だという議論が行われていた。この検討会議は、地域のエコツーリズムや利用の推進を持続的に行うことを目的に長年開催されてきたが、この基盤となるエコツーリズム戦略についても見直しのタイミングであり、この後に議論をいただきたい。本日の検討会議の議題は、まず長期モニタリング計画に基づく調査結果を報告頂き、個別部会や関係機関による取組みを報告いただく予定だ。次に、エコツーリズム戦略の見直しについて、知床らしい自然体験を推進していく観点から議論したい。また、現在、インタープリテーション全体計画（以下、「IP全体計画」とする。）の策定も進行しており、その進捗についても共有し、来年度に向けた具体的な作業の方向性について議論頂きたい。また、昨年8月に羅臼岳の登山道で発生したヒグマ人身事故についても、関係機関で構成される知床ヒグマ対策連絡会議で議論を重ね、事故の検証と再発防止策の方向性の案を取りまとめている。本日もご説明をさせていただき、地域の皆様から意見を伺いたい。方向性が定まり次第、防止策を講じた上で、登山道の再開に向けた取組みを進めたいと考えている。本日は3時間と限られた時間だが、忌憚のない意見を頂戴できれば幸甚である。

葉山：委員の出席状況について報告する。本日は5名の委員が現地で参加している。石黒委員はオンラインでの参加である。また、地域関係団体からもオンラインを含め、多数の参加を得ている。次に、本日の資料について確認する。議事次第の裏面に資料一覧

を掲載している。不足があれば、運営事務局に申し付け頂きたい。なお、本検討会議の資料及び議事概要は、後日知床データセンターで公開される。それでは、以降の進行を愛甲座長にお願いする。

愛甲：本日はご多忙の中参集いただき感謝申し上げます。それでは議事を進める。最初の議題は、「長期モニタリング計画に基づく調査結果について」の報告である。

1. 長期モニタリング計画に基づく調査結果について

資料 1-1 2025 年度知床国立公園利用状況調査の結果(暫定版)

…知床財団・秋葉が説明

資料 1-2 長期モニタリング計画に基づく聞き取り調査の結果

…知床財団・坂部が説明

参考資料 1 適正利用の課題

…愛甲委員が説明

愛甲：説明に感謝する。例年、検討会議の冒頭は知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況について報告していたが、私の提案で本日は長期モニタリングの報調査結果をはじめに報告頂いた。この調査結果を踏まえ、出席頂いている地域関係団体の皆様からこの1年間を振り返り、観光やエコツーリズム、身近な環境の変化に関する意見を伺いたい。出席者名簿の順にウトロ地域協議会から発言をお願いする。

桜井：この1年を通して、さまざまな方から現場に即した多様な意見が出ていると感じた。地域住民からは知床における自然環境が変わってきたと聞いている。ガイドを実施している方々ではなく昔から地元で生活している方々にも話を伺ったが、植生の変化が課題だと語っていた。個人としても環境、気候、植生の変化を懸念している。

新村：観光の立場からの意見だが、長期モニタリングの結果報告の通り今年度はインバウンドの比率が20%近くまで上昇してきた。インバウンド増加に伴う課題としてオーバーツーリズムが注目されている。冬季に外国人観光客が増加した影響もあり、スーツケースを持って公道を歩いている観光客の危険性について地元住民から指摘をいただいたところだ。これらの問題を受けて自治会とも相談し、空港からエアポートライナーでウトロに到着した後、マイクロバスに乗換えて頂き、ホテルまで直接送迎する事業を行っている。観光の入込みは大切なことであるが、地域があってこそその観光であり、今後も地域の皆様と協働で事業を行いたい。

愛甲：ご意見に感謝する。次に羅臼町観光協会がオンラインにて発言できないため、知床ガイド協議会から発言をいただく。

滝澤：この会議にあたり知床ガイド協議会の中から意見を集めたが、桜井氏と同様に自然環境が変わってきているということ語っていた。私自身も山岳ガイドをしているなかで凍結や降雨の時期が変わってきたことで登山道の荒廃が進んでいると感じている。また、羅臼岳でのヒグマ人身事故を受け、事故直後は各業界の方や町の方は影響は限定的だと述べていた。しかし、長期的に見通しの立たない状況が作られた結果、事故発生後から来年度の夏季に至るまで業務に幅広く影響を及ぼしている。これまで知床はヒグマに対して知見があり、対策を行うシステムが構築されていると思われていたが、今回の事故を受けて長期にわたり対応策の結論が出せなかったため、知床のヒグマ対策に対する今までの信頼を失ったと感じている。現状を受けて旅行代理店含めて知床への集客は減ってきており、修学旅行等の団体利用についても実施できないと述べるガイドもいる。そういう意味でも徐々に影響が広まっていると考えている。

愛甲：ご意見に感謝する。ヒグマ事故への対応については本会議の議事にもあるため、後ほど議論いただく。次に知床財団から発言をいただく。

村田：知床財団の立場からは感覚的に地域全体が多様化していると感じている。プラスの要素もマイナスの要素も含めてさまざま変化が進行している。先日札幌で知床 20 周年記念シンポジウムを開催したが、その中では科学委員会等の専門的な軸と、地域連絡会議のような地域目線の軸の両者の関りがますます重要になるとの指摘があった。これらの仕組みを支えているのが管理機関としての行政機関と認識している。地域の意思や意見も多様であり、すべてがまとまるものではないが、これらをきちんと整理・発信することが重要だと考えている。

綾野：羅臼岳ヒグマ人身事故を受けて、利用者の行動が大きく変化した。事故を受けてキャンセルが増える一方で、単独での行動に不安を感じてガイドツアーを申し込む方も増えた。結果としてガイド利用者は増加したため、非常に忙しかった。自然保護協会からの意見としては、人身事故の 2 日前からヒグマの異常な行動に気付いていたのにも関わらず、なぜ登山道を閉鎖しなかったのか疑問だ。例えばフレペの滝遊歩道は利用調整地区でもないのにヒグマが出没した段階で遊歩道を閉鎖している。なぜ羅臼岳の登山道は異常な行動をしているヒグマが出ていても閉鎖しなかったのか。また、異常な行動をしていたヒグマが駆除されたその後もなぜ登山道を閉鎖していたのか。一連の対応は失敗であったと考えており、ヒグマ出没時の対応のあり方に矛盾を感じている。本件に関しては管理者からの具体的な説明を求める。

愛甲：事故の検証については本会議の議事にもあるため、後ほど議論したい。次に斜里山岳会から発言をいただく。

笠井：山岳会としても、羅臼岳におけるヒグマ人身事故が大きなトピックとなった。山岳会は遭難対策協議会の構成員としての役割があり、知床の山岳地域における遭難対策を担う存在でもある。そのような意味で隊員としての立場上、登山道の現状を把握するために早期に登山道に入りたい気持ちがある。

愛甲：続いて、羅臼山岳会および羅臼遊漁釣り部会はいずれも本日欠席のため、知床小型観光船協議会から発言をいただく。

神尾：ウトロ側の観光船に関してだが、観光船事故以降少しずつ利用者の信頼回復が進み利用者が増加しているが、一方で観光船運航に関するルールの厳格化により、経費負担が大幅に増加した。特に人材確保や船舶に係る費用が増加し、経営を維持するために全体の経費を見直す段階にある。ウトロ全体で見ても事業を行う会社自体が減ってきており、各事業者は財政的に非常に厳しい状況下にある。この場を借りて観光船事業の実態について報告させていただければと考えている。

長谷川：羅臼の観光船はウトロ側に比べ観光船事故後の影響は低く、業績は堅調であり利用者のインバウンド比率に関しては38%まで増加した。中国人観光客は減少したが、欧米含め他の国外の観光客は増加したと感じている。また、観光船事業のことではないが、知床20周年シンポジウム等の内容も拝見したが、20年の節目の話題として過去と比べ知床の環境や地域が好転したかどうかという大切なことが語られていない。例を挙げると知床岬に関しては20年前と比べ外来種の増加により植生が大きく変化した。他にも海や川に関わる自然環境が変化し、水産事業にも大きく影響を与えている。20年前と比べて自然環境が大きく変化している現状を直視して、徹底的に議論していただきたい。

向山：知床で働く職員の安全管理を見直す必要があると思っている。我々は斜里側の関係機関の皆様方と制度運用や管理について携わらせていただいているが、その場で色々な知見をいただきながら、今後のさまざまな業務に活かしていきたいと考えている。また、自然公園財団は知床のみならず、全国的に展開している組織であるため、ツキノワグマを含めたクマのニュースに関しては全国の各支部と情報の共有を図っている。これらの知見を知床の皆様と共有して活用できればと考えている。

愛甲：ウトロ海域環境保全協議会は本日欠席となっているが、代理として環境省より補足や発言はないか。

田中：特にない。

愛甲：さまざまな意見に感謝する。各地域団体の意見を踏まえて、これからの議論に繋げてまいりたい。続いて、次の議事に移る。個別部会等からの報告は、すべて通しで説明いただいた後に質問やコメントを受け付ける。

2. 個別部会等からの報告

(1) 厳冬期の知床五湖エコツアー事業

資料 2-1 2025 年度 厳冬期の知床五湖エコツアー事業計画

…知床斜里町観光協会・新村が説明

(2) 知床五湖地区における取組み

資料 2-2 知床五湖における取組みの進捗状況について

…環境省・二神が説明

(3) カムイワッカ地区における取組み

資料 2-3 カムイワッカ地区における取組の進捗状況について

…斜里町・岩淵、環境省・伊藤が説明

(4) ウトロ海域における取組み

資料 2-4 ウトロ海域における保全と利用の取組みの進捗状況について

…環境省・田中が説明

愛甲：説明に感謝する。質問やコメントがあればお願いします。

長谷川：知床五湖のスイレン除去に関してだが、除去作業のツアー化などではなく除去を行うなら徹底的に行うべきだ。先ほど述べた知床岬の事例も同様だが、20年前と比べて大きく変化している環境は徹底的に改善するように動くべきだ。自然環境の保護については我々が生きている間のことだけではなく、将来的に長く続けなければならない事案だ。これらの対応にはあらゆる面で手間や資金が必要となる。現時点で総力を挙げて対応することでこの先の20～30年と続く自然環境の保護に寄与すると考えている。本会議等の委員や知床財団が意見を述べ、国や人を動かして対応して頂きたい。

愛甲：ご意見に感謝する。他に質問やコメントがあればお願いします。

石川：知床五湖のスイレンについて、1湖のほかに2湖や3湖でも確認されているのは事実か。

二神：事実だ。特に3湖では急激に分布が増加している。これへの対応は来年度の課題として検討している。

石川：現在の知床五湖の現状を直接把握していないが、1湖のようにスイレンが全面的に広がってしまうと問題だ。また、除去の対応については早急に対応しすぎると想定外の変化を招きかねないため、慎重な対策を進めていただきたい。

二神：スイレンの除去については専門家に意見を聞きながら対応していく予定である。

愛甲：ご意見に感謝する。先ほどカムイワッカ地区での報告の中で課題提起があった。カムイワッカ部会の現状としてカムイワッカ湯の滝の事業とマイカー規制等の交通アクセス事業を担っているが、主に経済的な面で交通アクセス事業に課題があるとの報告だ。また、部会の役割も拡大し、当初想定していた目的からも乖離が生じている。今後のマイカー規制を含めたアクセス事業のあり方を別の会議体で検討するか、本検討部会で引き取るか、どのような場を形成するのが相応しいのか課題提起いただいている。こうした課題は、各部会と本検討会議の関係性など全体の枠組みにも影響する話題であり、エコツーリズム戦略の見直しにも係るテーマだ。特定の部会で検討するのではなく幅広く議論する場を設けることも視野に入れつつ、どのような整理が望ましいのかを検討する方向で進めたい。本件について地域の皆様や委員の皆様からご意見あればお願いします。

一同：(質疑なし)

愛甲：全体として意見がないようであれば、先ほど課題提起で説明頂いた方向で検討を進めるものとする。

3.関係機関の取組み報告

(1)国立公園指定60周年・世界遺産登録20周年記念事業について

資料3-1 知床星空散歩事業の実施結果と今後の計画

…斜里町観光協会・新村が説明

資料3-2 SHIRETOKO Adventure Festival 実施報告について

…斜里町・吉田が説明

(2) シレコプロジェクトの進捗について

資料 3-3 シレコプロジェクトの進捗について

…羅臼町・白柳が説明

愛甲：説明に感謝する。質問やコメントがあればお願いします。

松田：知床星空散歩事業について、全体の方向性としては提案の内容でよいと感じる。一方でイベント利用の観点としてはガイド 1 人当たりの利用者人数は状況に応じて変動させるべきだ。具体的には人数の多い場合はガイドに対してサポート要員を加え、イベントを進めていくのが望ましい。また、利用に関してはルールの詳細化が必要である。例えば、ライトの使い方や駐車場への駐車の方法、複数のガイドがお互いに協力する部分など具体的な共通管理を進めるべき。また、事業実施中の雰囲気として売店の自動販売機の光が気になるため、配慮していただきたい。

新村：詳細については今後相談させていただきたい。また、サポート要員という言葉が出たがどのような認識か。サポート要員はガイドという認識か。

松田：サポート要員に関しては安全管理を含めた議論の必要があると考えている。観光協会の職員がサポート要員として動ける方がイベント利用を円滑にすることができるのではないかと感じる。詳細に関しては今後相談させていただきたい。

愛甲：シレコプロジェクトについてお聞きしたい。長期モニタリングによる利用状況の調査によると全体として羅臼側施設の利用者数が増えていた。また、先端部地区の利用者数も増えていたが理由は分析しているか。利用者数の増加はルサフィールドハウスで実施している取組みの影響か。

白柳：シレコプロジェクトは知床財団への委託業務として実施している。これまでの実績やルサフィールドハウスでの取組みについては知床財団から説明をお願いしたい。

坂部：先端部地区の入込み数については、利用状況調査の結果が前年比 400%という数値になっているが、これは昨年度のデータが一部欠損しているため見かけ上増加しているものだ。ルサフィールドハウスの来館者については過去最高の利用者数であったのは確かであるが、レクチャー数やレンタル販売数は増えておらず、例年並みの状況と認識している。ルサフィールドハウスでは昨年、環境省による駐車場の拡張工事が実施され、それに伴い利用しやすくなり、来館者が伸びたと考えられる。

愛甲：説明に感謝する。議事 3 を終えたため、休憩とする。再開後、羅臼岳ヒグマ人身事故を踏まえた検証と対策の方向性についての議論を進める。

<休憩>

愛甲：それでは会議を再開する。議事 4 について議論を進める。

4. 羅臼岳ヒグマ人身事故を踏まえた検証と対策の方向性について

資料 4-1 事故検証の結果と再発防止策の概要（案）

資料 4-2 ヒグマ生息地における登山の行動規範の策定と登山利用者への情報提供

資料 4-3 登山道におけるヒグマによる危険事案発生時の対応の見直し

資料 4-4 個体管理の強化（問題個体の特定と捕獲強化）

…環境省・岡野が説明

愛甲：説明に感謝する。質問やコメントがあればお願いします。

滝澤：説明いただいた資料については 3 月 2 日に羅臼で開催された世界遺産施設等運営協議会でも確認し、その場ではリスク評価の色分けに関することと情報発信のあり方についての 2 点を意見として述べた。本日の資料を確認したが、迅速に指摘が反映されており感謝する。特にリスク評価に関するリスク区分の色分けについては色覚多様性に配慮し、ユニバーサルカラーを用いる必要がある。一方で、資料では外国人に向けた情報発信に関する記述が不足しているように見える。日本人と外国人では行動のパターンが異なる。外国人向けに配慮した情報発信のあり方についてより踏み込んで記載を頂きたい。また、資料内の用語についてだが、知床内ではヒグマ対策に用いられる道具の一つとして「フードコンテナ」という用語が用いられるが、これは一般的な用語ではない。また、英語表記にした場合も伝わりにくい。こういった用語についても引き続き検討をお願いしたい。

岡野：ご意見に感謝。外国人対応は大きな課題と認識している。各国の特性等を踏まえながら情報発信のあり方について精査したい。一方で、現時点で海外からの登山者の規模や国籍などは把握できておらず、こうした調査を実施し、検証しながら対応を進めたい。

滝澤：外国人登山者の特性の一つとして日本人が登山をしない時期にも登山を行っている。

日本人向けの調査を行っている、外国人の行動を取りこぼす可能性があるため注意が必要だ。

山中：大きく2点意見がある。羅臼岳ヒグマ人身事故を契機として今回の対策が整理されたのは良いことであるが、対応策を適切適時に実施するためには事故が発生する前に予兆を感知するシステムを構築する必要がある。知床は情報収集という点では体制が充実しており、この度の事故でも事前に危険な行動を取る個体を感知できたが適切な対応がなされなかったのが残念だった。異常で危険な行動を取るヒグマの情報を漏らさず感知して記録する仕組みを再構築したうえで、今回整理した対応策を講じるべきだ。また、こうした予兆を感知するシステムは7月から9月にのみ稼働するのではなく、ゴールデンウィークころから登山利用がはじまるのだから、感知システムの予行演習の意味も含めて登山ガイドなどの協力を得て早期に情報収集を開始し、より幅広い時期に適用して問題個体を把握するように努める必要がある。

2点目はアクセスコントロールについてだが、幌別以奥のシャトルバスシステムによるアクセスコントロールは喫緊の課題だが、全ての期間に実施するのは困難であるため、アクセスコントロールができない時期のバックカントリー利用者への対応を検討する必要がある。知床のバックカントリーは世界にも通用するレベルだが、その利用に関するシステムが世界レベルから大きく立ち後れているのが問題である。利用に関するシステムとして知床のバックカントリーを利用するためには入場ゲートがあり、そのゲートを通る際に点検を受けるようなシステムが必要だ。そのようなシステムについては2000年台初頭から半島先端部等を広域的に利用調整地区とするための検討がされてきた経緯があるにも関わらず、林野庁と環境省の対立により実現には至っていない。利用調整地区のようなシステムを知床のバックカントリーに幅広く適用し、レクチャーや講習を受け、必要な装備の点検を受けるなどをしたうえで許可を受けた者には最大限の自由を与える仕組みを構築するのが安全対策として望ましい。利用の将来課題として、アクセスコントロールと共にバックカントリー領域の利用調整地区のシステムについて、「事故検証の結果と再発防止策の概要」の中の検討事項の項に記載頂きたい。

岡野：情報収集の精度を高める必要性については指摘の通りと感じている。7月から9月を中心としている登山道での対策の実施時期については運用状況を踏まえながら見直しを行いたい。また、登山道再開のタイミングは、再発防止策の準備が整った後と考えているが、事前に関係者で登山道を確認する等の準備期間も必要と認識している。中長期的な課題については地域連絡会議のメンバーとも協議したい。

長谷川：アクセスコントロールに関してだが、登山やバックカントリーの利用者は早朝から

行動を開始する。施設の開館している時間帯と異なっている。ゲート施設として機能させるためには、時間外の対応が必須だ。

また、知床岬におけるエゾシカ個体数調整についてだが、駆除を行った際のエゾシカの死骸は現場に残置しているのか、或いは持ち帰っているのか。

鈴木：原則として、エゾシカの死骸は持ち帰っている。

長谷川：エゾシカの駆除は継続して実施すべきだが、残置は避けるべきである。話は戻るが、アクセスコントロールについては利用者が早朝や夜間に行動した場合に対応できないという時間的制約が生まれるため、対応が難しいと感じる。

岡野：利用者の行動時間についても考慮し、検討する必要があると思っている。

山中：ビジター施設やゲート施設の運用時間であるが、夜明け前から登る百名山はしご登山のような駆け足的な登山者の利用時間にまで無理に対応する必要はないと考える。むしろ、ルールや制度を整備し、前泊しなければ利用手続きができない仕組みにしても、宿泊も増え経済効果も期待できる。いたずらに利用者のニーズに応えるのではなく、知床のバックカントリーをどのように楽しんでもらい、どのような体験をしてほしいか、という哲学が先にあるべきだ。

岡野：どのような体験が望ましいか、それをどこで実現できるか、といった議論は進行中のエコツーリズム戦略の見直しの根幹でもあり、今後地域的な議論が求められるテーマだと考えている。

愛甲：技術的な事例だが、私に対応した事例の一つとして、山岳地域の他の国立公園においてビジターセンターの設計を行った際には、早朝などの開館時間外における屋外での情報提供の工夫が必要であると指摘したことがある。本件に関しても、登山口の管理と併せて、登山者が時間外に情報を取得できるような仕組みを構築すべきである。

間野：資料 4-3 について技術的な質問をさせていただく。11 ページの「ヒグマに関わる危険事案を確認した場合の現地対応」のフロー図において、閉鎖後に一定期間が経過した後に「リスク評価を『極めて危険』から『警戒』に下げ、登山口の閉鎖解除の閉鎖解除」とあり、フローがここで終わるため、通常運用に移行するプロセスが明示されていない。

岡野：資料 4-3 の 9P に記載があるが、通常では 7-10 日程度の更新頻度を想定しており、そ

の日数の経過によってさらにリスク評価を下げ、通常運用に移行するものと考えている。

愛甲：間野氏の指摘は、対応フロー図においてその記載がないため、フローとして分かりやすく記載すべきとの指摘である。ご対応いただきたい。

船木：2点ある。1点目は情報発信のメディアについてだ。ヒグマに関する情報がwebサイト上で散在しているとのことだが、観光客が訪れる知床世界遺産センターや知床自然センター、羅臼ビジターセンター等の各施設においても包括的にヒグマ情報を整理・蓄積している空間的な場所は存在しないと認識している。物理的にもこうしたコーナーを設置する必要がある。

2点目は行動変容に繋がる発信のあり方についてだ。資料では基本的に注意喚起による普及啓発で行動変容を促すことが主な対策とされているが、普及啓発は直接的な規制や経済的な手法と比べ、行動変容の効果が期待しづらい手法だ。コスト等の課題があるため難しいと感じるが、クマスプレーを無料貸出するなどといった経済的なインセンティブを用いるなど、多様な手法を併せて検討する必要がある。実状として利用者が普及啓発を軽視しているような事例も見受けられるため、普及啓発の推進のほかにも戦略を考える必要がある。

岡野：普及啓発の難しさについては理解している。また、直接的な手法や経済的な手法については、運営コストも含めて地域に負担を強いる側面もある。こうした経済的な負担も含め、誰が担うかを含め総合的に議論していく必要がある。

桜井：ヒグマの出没については季節的、時間的にどういった場所で出没しやすいかなどの傾向は特定できると思う。登山道の入り口で注意喚起をしても、知床を熟知している方や経験者の方は把握できるが、初めて訪れた方や初心者の方は土地勘なく、地名もわからないため、こうした情報の判断がつかない。登山道沿いのヒグマの出没しやすい場所や過去に出没した場所に掲示や標識を設置するといったアナログ的な対応可でないか。

滝澤：岩尾別登山道の標識は去年の秋頃に再整備がなされており、既に多すぎるほどの看板が存在しており、地点表示などは十分な状況だ。

資料4-3によれば、リスク評価は登山道のコース別に行う想定だと思うが、実際はコース全体に一律のリスクがあるわけではなく、特定の地点や区間に遍在する。こうしたことも表現の際は念頭に置くべき。また、リスクの表示については日本雪崩ネットワーク等のサイトが参考になる。こうした事例を参考にしながらリスク情報の表示

について磨きを掛けるべきだ。

岡野：ご指摘の通り、資料 4-3 の 8P にあるようにリスク評価にあたってはヒグマの餌資源の分布や季節移動などを総合的に考慮して判断する必要がある。また、10P に記載の通り、情報の掲示にあたっては危険個所や目撃場所等の情報も掲示することを検討しており、総合的なリスク情報をわかりやすく表示する方法を検討してまいりたい。

愛甲：対策については初年度が重要であるが、実施後の検証や評価も重要である。情報発信についても実施と検証を繰り返し、改善を図る順応的な方式が必要だ。

笠井：今回の事故はヒグマによる人身事故の側面が強調されている印象があるが、山岳遭難という側面も重要だ。そのような意味で、登山道の管理や整備のあり方についての言及が弱いと感じている。遭難対策協議会の構成団体である山岳会としては、登山者目線で登山道の安全や整備について検討する必要があると感じている。具体的には、オホーツク展望から上の区間について、見通しの確保を目的とした枝払いや等を実施できればと考えているので検討いただきたい。

岡野：検討させて頂く。

愛甲：さまざまな意見を頂いた。これらの意見を踏まえ、再発防止策を着実に進めて頂きたい。本件については 3 月 25 日に開催予定の地域連絡会議で最終的に決定する予定である。それでは議事 4 を終え、後続の 2 つの議事について進める。議事 5、議事 6 については関連しているため、まとめて説明いただき、最後に質問やコメントをお願いする。

5.エコツーリズム戦略の見直しについて

資料 5-1 エコツーリズム戦略見直しの方針と構成案

資料 5-2 知床エコツーリズム戦略に盛り込むゾーニングについて

…環境省・葉山が説明

6. インタープリテーション全体計画の策定状況について

資料6-1 インタープリテーション全体計画とストーリーブックの構成案

…知床財団・山本が説明

資料6-2 知床エコツーリズム戦略に盛り込むゾーニングについて

…環境省・伊藤が説明

愛甲：エコツーリズム戦略の見直しについて補足する。本日午前中に開催したエコツーリズムWGでもスケジュールやロードマップの説明を行い、指摘をいただいた。今回の検討会議でいただく意見や冒頭でいただいた各地域団体の皆様からの意見も踏まえて作業を進めたい。また、先ほど説明のあったゾーニング案についてはインタープリテーション全体計画で説明をしていた内容と統合した案を事務局で作成いただく予定だ。エコツーリズムWG等の場で議論や確認を行なった後に検討会議へと提示し、来年度中を目途にエコツーリズム戦略を改定したい。また、例年であれば知床エコツーリズム戦略に基づく提案の進捗状況を報告いただいていたが今回は省略している。ここ数年新たな提案がないことが理由だが、提案に繋がりそうな案件も生まれてきているため、提案者にメリットのあるような仕組みを作れるとよい。本日はあまり時間が取れないが、皆様から意見があればお願いしたい。

山中：資料5-2について、地域関係者と時間をかけて議論し、とりまとめた「知床半島将来ビジョンゾーニングとイメージ（案）」が反映され嬉しく思う。一方、「策定された当時から時間が経過し乖離が生じつつある」との記載があるが、これは当時の現状を整理しているわけではなく、将来的にあり得る、あるいは望ましいビジョンを描いたものだ。内容が乖離しつつあるのではなく、むしろ当時想定した将来のあり方に現状や利用者の需要も含めて近づきつつあると考えているが、具体的にどの部分が乖離しているのか教えていただきたい。

葉山：自然環境の変化が大きいと思っている。例えばルシャではサケの遡上は少なくなり、観光船からもヒグマの目撃は減っている。一方で利用者のニーズや行動も多様化、変化し続けているものと認識している。ゾーニングとイメージ（案）で示された利用のあり方の方向性も含めて今回統合し、反映していきたい。

愛甲：ゾーニングとイメージ（案）についてはインタープリテーション計画で検討している内容と併せて統合する作業を行い、皆様に確認いただく段取りとしたい。ワーキンググループで議論すると同時にメーリングリストに入っている皆様にも確認頂きたい。引き続き忌憚のない意見をお願いする。

7.その他

石川：会議の冒頭に各地域団体から発言をいただき、それについてコメントしたい。桜井氏、滝澤氏の両名から植生の変化について懸念されているコメントがあった。こうした意見について、エゾシカ WG などでも取り上げる必要を感じたところだ。エゾシカ WG の座長をしている立場としては、エゾシカによる影響の現状把握という側面で植生について注視していたが、現場を見ているガイドや地域の方の意見を吸い上げてエゾシカ WG や他の会議体でも共有することが重要と感じた。事務局には、情報の吸い上げ方や共有の方法について横のつながりを意識して検討頂きたい。

松田：モニタリング調査の結果について、データの表示について改善すべき。資料 1-3 の観光客の入込み数のグラフは、日帰り客数が下部に、宿泊客数が上部に積み上げられた棒グラフだが、入込み数の把握としては宿泊客数がより重要であり、要素を入れ替えた方が良い。日帰りの入り込み数はデータ自体も推計なので実態と乖離している。一例であるが、こうしたことに配慮することでより分析や評価が捗ると思う。また、モニタリングデータの収集については、現在の調査だけでは不十分な部分もある。特に、現場で発生している事象的な変化についてはヒアリング等を通じて把握すべき。植生の変化についてのコメントもあったが、同様に懸念している。これはエゾシカによる影響に加え、気象による影響の可能性もある。ここ 2 年間は初夏から秋にかけてほとんど降雨がない。知床五湖のスイレンが増えているのも水深が浅くなってきた影響が考えられる。こうした事象について、現場からのヒアリングを実施し、参考として頂きたい。

愛甲：ご意見に感謝する。現場の状況を伺えるのも本検討会議の良い部分である。他のワーキンググループ等にも共有していく予定だ。他にご意見等無ければ議事を終了して事務局に進行をお返りする。

葉山：皆様の活発な議論及び長時間に渡る対応に感謝申し上げます。以上で令和 7 年度第 2 回適正利用・エコツーリズム検討会議を終了する。

(閉会)